自然災害科学 *J. JSNDS 25-2 131-133*（*2006*）

巻頭言

防災文化について

神戸学院大学　教授
佐　藤　忠　信

防災文化という言葉を聞かれた方はおられるだろうか。ここでは災害を防止し軽減するために培われてきた知識や技術，社会の構造，それらを伝承して行くための教育システムなどの総体を防災文化と名づけることにして，防災を文化として定着させるための事柄について考えてみたい。

日本は台風の常襲地帯であり，地震や火山の噴火も頻繁に起こっている。このため，古くから地域にはそれぞれ特有な災害経験の積み重ねがあって，災害をうまく避ける事前の対策が講じられてきた。たとえば，富山県の砺波平野に見られる散村は，強風による火事の延焼被害を軽減する方策として考え出されたものであり，濃尾平野に見られる輪中集落は毎年発生する洪水から住みかを守る知恵であった。豪雪地帯では，屋根に積もった雪の重みで家屋が潰れるのを防ぐため，雪落としを自然に行なえるように屋根の勾配を急にしている。また，台風常襲地帯では低くて平らで重い屋根を作ってきた。これらは，長い年月をかけて社会や人が経験してきた災害体験に基づいて，社会のしくみや人々の生活を律する暗黙の規範や行為，さらには物の考え方として定着してきた様式であり，「災害文化」と名づけられるものである。

一方，安全を確保するために人間社会の組織が持っている構造やそれを管理するための習慣を含めて，組織が醸成してきた信念や取り組み，安全に対する態度や価値観を「安全文化」という。この言葉は1986年のチェルノブイリ原子力発電所の事故の後にまとめられた「事故後検討会議の概要報告」の中で始めて登場した新しい安全に対する概念である。事故を防止軽減する立場から，学習する文化，報告する文化，正義の文化に分類されているが，その正確な意味や測り方について社会的な合意が得られているわけではない。

文化は，「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む」と広辞苑に定義されている。社会の成熟度が増していくにつれて文化的な事柄はその精緻さと繊細さを増していくが，防災や減災に関するもろもろの知識やそれに基づいてきめられているしきたりや決

まりが文化といえるまでになっているかどうかは定かではない。災害を防止・軽減するための工夫や技術が，社会の構造や人々の生活様式の中に自然に溶け込んで行き，体系にまで作りあげられた時に防災文化という言葉が定着するのであろう。華道や茶道は日本の誇れる文化であることは万人が認めている。防災先進国である日本が防災に関する文化を華道や茶道のレベルまで高め，その発祥の地になってほしいと願っている。

では災害とはどんなものをいうのであろうか。異常な自然現象や人為的な原因によって人間の社会生活や人命の被る被害を災害というのが一般的であるので，災害と名づけられるものを列挙すれば，自然災害，火災，交通災害，労働災害，情報災害，環境災害，戦争・テロなど多種多様である。人の住む社会の構造が変化すると災害の様相も変化するので，時代とともに焦点が当てられる災害の項目も変化して行くと考えられる。こうしたことを明らかにするためには，各災害の強さを評価する基準が必要になる。

例えば，その尺度として年間の死亡リスクを取ってみると，それが千人に１人の死亡レベルの場合には，リスクを減少するために緊急の行動が取られるのが普通で，1万人に１人のレベルは公的な財源でその減少を図る対策が立てられるようになる。10万人に１人になると親が子供に危険だから気をつけるように注意を促すレベルになり，百万人に１人のレベルになると普通の人はほとんど関心を持たなくなると言われている。こうした観点から上に述べた災害を分類すると，戦争・テロなどの対象地域では緊急の対応が必要なレベルに達することが多い。わが国では，交通災害や労働災害を減らすことが社会的に重要な課題として認識され，公的な対策が立てられ，従来は１万人に数人程度の死亡率であったが，最近は前者が10万人あたり６～７人の死亡，後者が10万人に１～２人の死亡レベルまで減少してきている。地震災害を除いた自然災害全体では，第二次世界大戦直後に10万人あたり数人の死亡であったが，国を上げての防災対策の効果で現在は百万人に１～２人のレベルまで減少してきている。ちなみにガス事故では，１億人に２～３人の死亡レベルになっている。環境災害や情報災害は死亡リスクと言う観点から計ることは出来ないが，今後は大きな課題になる領域である。議論しておかなければならないのは，近年，自殺者が急増していることである。この数年の自殺者は毎年３万人を超えており，これは１万人あたり３人の死亡レベルで，社会環境が不安定になっていることの現れと見ることができる。こうしてみると各災害による死亡リスクのレベルにはかなりの差があることが分かる。各災害の ALARP（As Low As Reasonably Practicable）レベルを何処に設定するべきかについての社会的合意が必要である。評価の尺度を経済的リスクに変えると，どうなるのであろうか興味のあるところである。防災が文化のレベルに達していると言えるには災害の強さを統一的に評価できる尺度が必要であろう。

防災文化が定着すると．その基礎的な知識や技術が社会や個人の内面に自然にしみ込ん

で，無意識のうちにそれらが体現されるようになるはずである。このためには，防災に関する基礎教育が充実されなければならないことはいうまでもない。例えば，成人であれば誰でも一次救命処置ができるようになっている社会を実現するために，中学の保健体育の中に救命処置実習の時間を設けること，高校の特別活動で地域の防災活動に参加することを義務づけることなどが考えられる。また，災害を最小限にするためには災害を防ぐための各種の詳細なマニュアルが作られ，そのマニュアルが社会の共通の価値観にまで高められていなければならない。こうしたことを実現するための地道な努力と時間が必要である。

防災文化の定着は社会の安全と安心の創生に繋がっていく。「災害は忘れたころにやってくる」は災害文化をあらわす言葉であるが，「備えあれば憂いなし」が防災文化の言葉として定着して欲しいものである。